

45, 12.7 (2) ⑥

5018P

5, 0/5P

可成元三(11) ⑥

紀下410P~411P

改行

第八十七章 天武天皇(上)

天武天皇即位

天武二年(六七三)正月七日、群臣に酒宴を賜わった。・昨年の壬申乱での奮戦が、いう

までもなく大きな話題になった。

二月二十七日、大海人皇子は有司に命じて壇場を設けさせ、飛鳥浄御原宮で即位された。

また正妃菟野皇女を立てて皇后とされた。武勳を立てた人々に、それぞ

れ爵位(冠位)を賜わった。

四月十四日、大来皇女を天照太神宮へ遣わすに先だつて、泊瀬斎宮(桜井市初瀬。ただし、斎宮の所在地は未詳)にお住まわせになつた。

三輪山を阿蘇の外輪山、初瀬川を白川に見立てるとき、初瀬川上流の合流点(南流する支流と、西流する支流の合流点)あたりに

聳える天神山(四五五呎)が、阿蘇の中岳に相当すると考えられたとであつたろうか。

単なる思ひつきにすぎないか、あえて述べる

下396P ④4922P ④4924P
399P ④4924P
412P 終

5,016

えっ
も卒す

坂本④4940P
紀下412P
あはる

紀下412P

①大和国の初瀬川近傍に泊瀬斎宮はあつたの
だらうか

②いや、そうではない、大和国の泊瀬に相

る大倭国(肥後国)白川北岸の古京にあたり泊

瀬斎宮があつたのかも知れない

泊瀬斎宮は、まず身を潔め、一だいに神に

近づいたのところがとされたのだつた。(紀)

五月二十九日 大錦上坂本財臣(昨年

七月一日の夜に大和国の高安城を攻め取つた

が卒した。壬申の年の功勞により、小紫の位

をお贈りになつた。

なお、これより後、

壬申の乱において活躍した者が卒した時、

位階を上げた

という記事が頻出する

以下、割愛したい

翌天武紀三年(六七四)二月二十八日条に

紀臣阿閉麻呂卒せぬ 天皇 大きに悲

びた 壬申の年の役に勞りしを以て大

紫位を贈ふ

とある (第一巻末尾の年表、六七四年参照)

5,017^P-1/2

新8-11-424 紀下415^P末 ②223^P
674^P 427105 5331

石上神宮の神宝を油で磨く

■天武紀三年（六七四）八月三日条に、こう

記されてゐる。

「忍壁皇子を石上神宮に遣して、膏油を以

て神宝を瑩かゝむ。即日、勅して曰はく、

元来諸家の、神府に貯める宝物、今皆其

の子孫に還せ

とのたまふ

とある。

天武天皇は、勅して

「以前から諸家が石上神宮の宝庫に預けて

ゐる宝物を、今皆其の子孫に返還せよ

と仰せられたのだ

ここに、其の子孫に返還せよとあると

ころから察すると、

へずい分長い年月、諸家の宝物（武器や鏡

等であらう）が、石上神宮の神府に保管され

令和2(2020)6.19(金)~6.21(4回)
H9.5.17(土) 由5016 P57
H5.12.9(木) かも知小ない
毛

由5017 P79~

5,017 P-2/2

とはいえ 由5021 P-2/2
7.1.13 80%

小枝92%
貯43
由1059
預あす43

この頁18行

(続3)

1/19
2/19

ていた ✓
ように思われる。
恐らく、
忍壁皇子総指揮の下、石上神宮に長期
預けられてきた神宝を油で磨いて、
文字の有無を確認し、事の真相を暴露するも
のでない限り、みな、その子孫へ返還するこ
とにした。
という意味なのであろう。
日本後紀、延暦二十四年(ハ
五)二月条によると、なお大なる兵器が石上
神宮に所蔵されていたようである。(「日本
書紀」(下)日本古典文学大系、岩波書店、四一
六頁、注一参照) 入念に(手数と時間)
油で磨いて文字の有無を確認するのは、
かかると判別
平安時代になってもまた確認できないまま
大なる兵器等が石上神宮に保管され続け
たのも知らないうか

*

H9.5.174
H5.12.9(6)

5465017

天武34-674
12

5,018P

天武34-674 194
天武34-674 13 13

天武34-674 13 13

大来皇女と大津皇子

天武三年十月九日

瀬奈宮から伊勢神宮(宇佐国馬城峯山頂の天

照大神宮のことであらう)へと出発した。

皇女とはいっても、大来皇女の生涯は、必ずしも

も辛世ではなかったようだ。生母大田皇女(持

統天皇の姉)とは、大来皇女七歳、大津皇子

五歳のときに死別した。そして、これより以

降の二人には、数奇な運命が待ちうけていた

大来皇女は、壬申乱の翌年(天武二年)

十三歳の時に伊勢神宮(宇佐の内宮)の斎宮

と定められ、翌天武三年(六七四)から朱鳥

元年(六八六)十一月までの十二年間を斎

宮として過ごした。

未婚の皇女が、皇祖神としての天照太神宮

に仕える。斎宮という制度は、もつと古

い時代からあったのであろうといわれるが、

しかし制度として確立したのは大来皇女の時

からである。(「朝日新聞」昭和六十二年二月二十日)

5031P 詩賦 1009P 5,019P 天つき 改行 万ト71 紀F486 徳門 73P 5026-72

葉の舞台。日本書紀(下)日本古典文学大

系、山左波書后、四一二頁注一、五四四頁補注

一七一五參照)

もつとも、大来皇女の場合、壬申乱の折

の戦勝のおれとして、天照大神に仕えること

になったのだった。お仕えする

一方、大津皇子について、雄弁で

堂々たる身体で、度量も大きく、雄弁で

文武ともにすぐれ、詩賦を振興した

また、伯父天智天皇に愛された

と述べられてゐる。(懐風藻)へ大津皇子伝

「持統称制前紀」の朱鳥元年十月三日条参照

米 だったのか不明ながら

天照大神に仕えてゐる大来皇女のところへ、

何の前ぶれもなく、幼い

弟大津皇子が訪ねてきた。密かに

あるいは大津皇子は、倭国(大和国)から

大倭国(肥後国)へ向かう途中、おいて

決して行つてはならない宇佐国の内宮を訪れ

姉大来皇女と面会し俾

たのかも知れない。

万葉集に、

八林975^p

80-71^p 寛送³

5,020^p

5025^p

↑ ^{おほつのみこ}大津皇子、^{ひそかに}伊勢の^{かみのみや}神宮に^{くだ}下りて
^{のぼ}上り来ま^{とき}し時の^{おほくのひめみこ}大伯皇女の^{みうた}御作歌二首^{しゅ}がある。

四 万巻二一〇五

^{やまと}わが^せ背子を^{やまと}倭(大倭)へ^や遣^とると
^{あかときつゆ}さ夜深^ふけて^{あかときつゆ}暁露に^わわが^た立ち^ぬ濡れし
^{やまと}弟を^{やまと}倭(大倭)の方へ^{みおく}見送^つつた^たたずんで
^いいと、^よ夜は^ふ深^けけて^ゆき、^{みめい}未明の^{つゆ}露の^せいで
^いよう。私は^ぬ濡水^てて^まいました

五 万巻二一〇六

^{ふたり}二人^ゆ行^けと^ゆ行^き過^ぎ難^きき^{あき}秋山^を
^いかにか^が君^が独^り越^えゆ^らむ
¹³⁵ハ二人^{ふたり}で行^いつても^ゆ行^き過^ぎ難^きい^{あき}秋山^を、^{いま}今
^ごう^のど^のよう^にて^て弟^は一^ひ人^{ひとり}で^こ越^えて^いる
^の二^{ふた}首^{ふた}である。

米

5,021^P - 1/2

異様 226^P 竈 = 竈 122 竈 817^P 2字令片 444 936^P タイトル

下りて上り来まーし時

それにしても、この二首の詞書に、

大津皇子 竊下於伊勢神宮上來時、

大津皇子 御作歌二首

上り来まーし時の大津皇子の御作歌二首

とあって、奇異な感じを受ける。

・ どうして、

伊勢の神宮に下りて上り来まーし時

というおかしな言い方をしているのだろうか

■ 言うまでもなく、

① 伊勢国へ下り、伊勢神宮へ上り来まーし

時

② 伊勢神宮へ下り、大和国へ上る時

等であれば理解できる。

■ ーかーなから、①②いずれにせよ、本来、

下って上って来た

という事など、わざわざ述べるほどのことではない

途中

ニ

そつてい ち1293
想定 役は地につくこと

5,021^P - 2/2

い 拙 ち90^P
言い 回

「伊勢神宮に下りし時」、もーくは、
「伊勢神宮に上りし時」
と題するだけで充分なのである。
• それなのに、
へなせあえて、「下りて上り来ましし時」
という異様な言い回しをしているのだらう
か
と疑問に思われる。
ニニに、
おほつのみこ
へ大津皇子は、大和国から大倭国（肥後国）
へ赴く途中、宇佐国の馬城峯の山道を登
つてゆき、山頂の「天照太神宮」で斎宮とし
て仕えている姉大来皇女を訪ねた
と想定してみよう。
• 大和国から宇佐国（伊邪国）へやって来
たということは、
えよう。
「とはいえ、大和国から大倭国（肥後国）
へ向かう途中であつたのであるが、
「下つて来た」とい

て来た^きらともいえるわけである。

■ こう解^{かい}してみたい。

表^{おもて}向^{むか}き、大来皇女^{おほくのひめみこ}は伊勢国^{いせ}の天照太神宮^{あまてらすおほみかのみや}に仕^{つか}えたというこにされなければならな

い。しか^いし、実^{じつ}を言^いえは、大来皇女^{おほくのひめみこ}は宇佐国^{うさ}の口内^{くちない}

宮^{みや}（天照太神宮^{あまてらすおほみかのみや}）に仕^{つか}えた。

万葉集^{まんやふし}の編纂者^{へんさんしや}は、この事^{こと}実^{じつ}を明^{めい}確^{かく}に

端^はなからも厳密^{げんみつ}さを装^まい、中^{ちゆう}途^と半^{はん}

「下^{くだ}りて上^{のぼ}り来^きましし時^{とき}」

という分^{ぶん}かりにく^くい題^{だい}をつけたのであ^だらう。

と思^{おも}われ^れる。

■ も^もっ^もとも、本^{ほん}当^{とう}に詳^{しょう}細^{じゆう}を^とめたる事^{こと}に記^き載^{さい}す

る^るつ^つも^もり^りなら、

へ大津皇子^{おほつのみ}が、何^い時^つ、ど^いん^んな状^{じやう}況^{きやう}の時^{とき}に、

何^な故^げ日^ひ大和国^{やまと}にから日^ひ天照太神宮^{あまてらすおほみかのみや}に下^{くだ}り、

そ^そい^いて上^{のぼ}ろうと^とい^いたのかを述^つべ、

そ^そんな時^{とき}に、大来皇女^{おほくのひめみこ}が歌^{うた}を作^{つく}った。

と記^きす^すべきであ^あらう。

■ と^とこ^ころ^ろが、そ^そう^うい^いた^たこ^ことは、明^{めい}記^きされ

の山^{やま}道^{みち}を^を上^{のぼ}る^る大和国^{やまと}から宇佐国^{うさ}へ下^{くだ}り、馬城^{ばじやう}峯^{ほう}

とがあと ⑤ $5027^0 - 1/2$
359

止むを得ない

止むを得ない

やきうげん
し陰 2230°

204 元
罪 1500°

5,023°

204
室が 5019° 15°

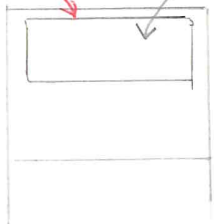
2025° 懐 73° 2025° 1801°
「27」 5019°

暁露にわが立ち濡れし
皇女の心の内は、どんなであつたらうか。
大津皇子は、性頗る放蕩にして、法度
おきて、禁令に拘束す
と懐風藻に記されてゐる。
大津皇子は、放埒にも気ままにふるまい、
禁令さえも意に介してゐなかつたのであろう。
そんな弟大津皇子を、
皇女は、
幼い大津皇子が、たつた独りで、
どうして一時間も会わずに追いつ返すことが出来
ようか。
姉大来皇女は、一人で罪をかぶるつもりで
禁令を破り、幼い弟と面会したの
暗闇があたりを覆い、小さな明りが麓の方
に見えかくみして、やがて山陰へ消えた。
私を訪ねてきてくれたのは嬉しいことだ

元 2289, 寧波, 元 1660, 元 1819, 元 966

何なりとも

左肩の左端、
上段・下段にそれぞれ
大きく掲載下さい。



左ノ限度一杯は独立して
F-24、

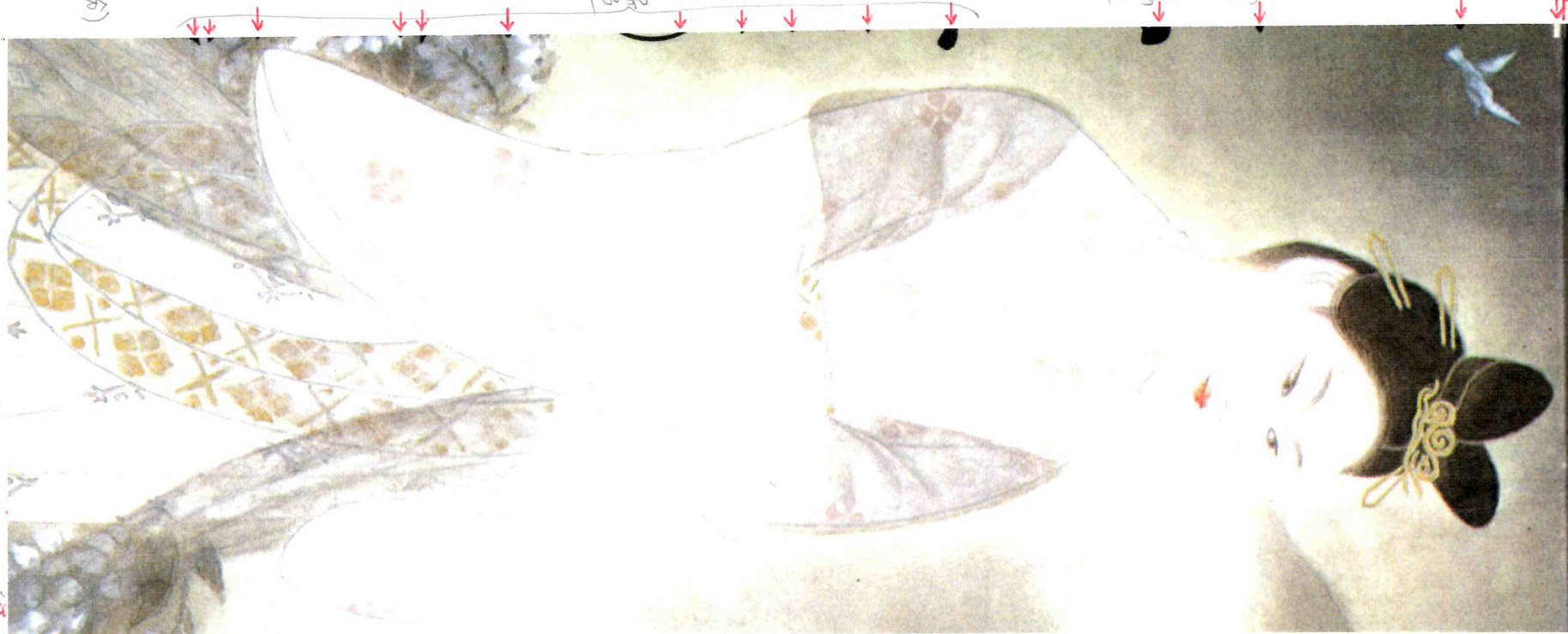
5,024^P - 2/2

* 1/2 元 1/10

申一わけありませんか、矢印部分を、
赤色の色と同様にしておいて下さい。
*ハの手を戻して調べなければ、文字の無い

（白地）
上端の
黒色の
帯状の中

「島を11(夜中に島は飛ばない)カサ↑



811の 大佐良女 5/66-3/3 胸上、 302

1428(2016)5、13
 茨城県立図書館
 レポートスロウ (2016)
 川島さんのお話。
 どうしてか、
 見つけた。

女 皇 合 大

1109 カバー菜園 山口芽能

は「^い芽」の「^い能」で「^いす」。

大来皇女 第54回 中西進 講談社 1991年8月20日(17刷)発行 カバー参照

こと

ひさがに ⑤ 5021-1/2
4行

ひ っ づ
引き続く 元 1855
⑤ 5020
⑤ 5020

5.025^p

二人行けど行き過ぎ難き秋山
ふたりや ゆ ゆ す かた あきやま

万巻二 一〇六の
二人行けど行き過ぎ難き秋山を
ふたりや ゆ ゆ す かた あきやま
いかに君が独り越ゆらむ
うた

の歌について考察してみよう。
もーもー、
大来皇女が、伊勢国(三重県)の天照太神
みみ ちほくのひめみこ いせ あまてらすおほみかみ
の宮において奉仕しており、姉を慕う
ほうし

弟大津皇子が、大和国から日秋山を越え
おほつのみこ やまと から 日秋山 を 越え
密かに独りで伊勢神宮へ下り、姉大来
ひめみこ ひと 伊勢の いせ くだ
皇女に会った後、再び日秋山を越えて大和
のほ につ かつた やまと
国へ上ろうとしていた

のである。
この万巻二一〇六の歌は奇妙
である。

大津皇子が密かに独りていつい今一が
おほつみこ ひそ ひと 12.5 PM いま

た越えてきたばかりの日秋山のことと、
ふたりや ゆ ゆ す かた あきやま

二人行けど行き過ぎ難き秋山
ふたりや ゆ ゆ す かた あきやま
なとと表現する筈はあるまい

⑤ 5026
-2/219
ゆけかない

とくになにか 次頁1行

「案」たの5.023¹⁰行

けい
山殿(い)のう

天つき
改行

5,026^P-1/2

と思わゆる。

四 恐らく、

へ大津皇子は、

を、大和国へ帰る為にもう一度越えようとし

ていたのではなく

ない、^{あきやま}秋山^{あそ}山^{あそ}（阿蘇の外輪山）を越え

て、大倭国（肥後国）へ向かったのであろう

と想像される。

■ そこで、

へ姉大来皇女は、幼い弟の^{あきやま}秋山^{あそ}山^{あそ}越えを

気遣った

栗^{あきやま}た

のではあるまいか。

■ この歌の裏には、

へ年長者である私（大来皇女）が幼い弟

を連れて行ってさえ行き過ぎ難い^{あきやま}秋山^{あそ}山^{あそ}越え

山^{あきやま}（阿蘇の外輪山）を、^{あきやま}秋山^{あそ}山^{あそ}越え

て奉仕している私が連れて行ってやれないも

のだから、弟はどんなにか苦勞して独りで越

えていることでしょう。また、これからの

ちや二人で助け合えば何とかなるくても、

場合

「想像される」次頁。

5,026^P - 2/2

同部
⑤5020' 意味の通ずる 次頁13頁
遅い 1364' 以上140'

わけではない
⑤5035' 14頁

第一人では、どんなにか難読する。とてい
う。といった意味があるように思われる。
とすれば、
この歌が作られた時、弟大津皇子は、
ゆかない少年だった。
そして、姉大来皇女は、亡き母に代わって弟
のことを思いやる、しっかりした女の子だっ
た。
と察せられる。
つまり、大津皇子の身体が、大きく、遅
くなったのは、——これよりずっと後の
後なのであろう、と推察される。
■第一、大来皇女は、弟大津皇子のことが
(別の意味合いで)心配ならなかつたとしても
——まさか、大津皇子成人後に、
二人行けど、行き過ぎ難き 秋山を
いかにか君が 独り越ゆらむ
などという歌を作る筈がない。ように思われ
る。

⑤5025' 20頁

45 けあるまい

秋火山の 87P 205 のは乃の草体 大カン7 45P 5.027 紀上140 586の1 地名集 449P カブト⑪

ともあれ、ここに歌われてゐる「秋山」は
 鈴鹿山脈の青山峠（五〇〇m）でも「秋山」
 加太越（三六〇m）のことでもなく、
 阿蘇の外輪山（ハ〇〇m程）つま
 り、「襲」の高千穂峯のことであらう、と考
 えてみた。い。（神代紀）第九段本文参照）
 （1）秋山の「秋」と、阿「襲」の「襲」とが、
 関連づけられ、歌われてゐるのかも知れない
 と定かならないことながら想像される。
 （2）また、「秋山」は、「周山」（めぐりなす
 山）外輪山（の趣旨にも解さる。）
 （3）そして、「秋山」を分解すると「千火ハ山
 すなわち「千火乃」（かひの）山」となる。（写真図版 769 参照）
 「幼い大津皇子は、「秋山」（高い千もの山）
 が連なる「襲山」を、独りで越えて行
 こうとしていたのであろう。
 尚、参考迄に述べると、霧島山の一名である「
 襲山」は、

三重県内
 青山（阿蘇）
 地名集
 11頁に載

5,027^P - 2/2

・頁の上半分に
大きく載せて
下さい。

206
の

がひ
なら

204
乃

205
乃

202
乃

203
乃

乃

乃の

乃の

乃の

の 乃

の 乃 小林理和 33⁷

の

1489

写真図版 769 乃

1389

ニだまニうた

『くずし字解説辞典』 見玉幸多、東京堂出版、平成5年5月25日新装再版発行、87頁参照。

タイトル 988^p
 990^p 5.028^p

1574^m 135⁷

霧島山群「九州」ブルーカードナンバー 地8890⁰
 202^p
 対比 990^p 19-278^p 高千穂
 989^p 19⁵ 991⁵ 19⁵

と いう。(「帝国地名辞典」太田為三郎、名

著出版へ「霧山」参照)

● 本来「日向(九州)の麓(阿蘇)の高千穂峰」というふう

● 阿蘇山(全体)を、「麓山」(「しゅうざん」)

● 外輪山のことを、「高千穂峰」

と呼びならわして来たのであろう。

と ころか、いつの頃からか人々は、阿蘇山

と霧島山群とを対比して考え

(1) 日向国(宮崎県)の霧島山群を「麓山」

(2) 阿蘇の外輪山を想わせる御鉢火山を山頂近

くに持つ秀麗な高峯を、「高千穂峰」

と呼びようになつたと観察される。(第十

二章へ高千穂峯の項参照)

*

天のき
改行
5,029^{P-1/3}

大津 大津 大津 大津
5018^P 683 23オ 21 ← 天武12年 大津 5018^P
673 13オ 11オ 天武3年 686年 24オ元
661 1オ 9 → 683年 21オ
紀下 5029^{P-1/3} 24 5018^P (年令) 紀下 457 5018^P 3 3

ここに予め、大津皇子にまつる記事を見ておきたり。
天武三年（六七四）十月九日に大来皇女が
伊勢神宮の斎宮として仕えるようになってから
九年後の天武紀十二年（六八三）二月一日糸に
大津皇子、始めて朝政を聴しめす。
とある。
な、この時、大津皇子は二十一歳であつた。
また、懐風藻、大津皇子伝に、
時に新羅僧行心といふもの有り、天文ト
臣の相にあらず、此れを以ちて久しく下位に
在らば、恐るらくは身を全くせざらむ。
と、いふ。因りて逆謀を進む。此の誣誤に迷ひ
遂に不軌（謀反）を圖らす。嗚呼惜しき哉。
彼の良才を藎みて、忠孝を以ちて身を保たず。
此の奸豎（ニもの。人をいやしめた言葉）に
近づきて、卒に戮辱を以ちて自ら終ふ。古人
の交遊を慎みし意、因りて以みれば深き哉。

大津皇子の
かめり正、大津皇子から
哉（かち）になる

Spille 5029-2/3 参考 3 頁 7 行
 (5017P) 4/12.7.27-5021-1/2 5008-1/2 5029-2/3
 5089-1/2 5021-1/2 5029-2/3

天智天皇、天武12年(683) 58才で薨御
 紀下486P 5166P 紀下486P 5018P 5179P

時に年二十四とある。

③そして、持統天皇称制前紀の朱鳥元年へ六

八へ十月二日条に、

皇子大津、謀反けむとして発覺れぬ。云

とあり、大津皇子は死を賜ることになった。

④翌日の朱鳥元年十月三日条に、

皇子大津を譯語田(奈良県桜井市戒重の

地かという)の舎に賜死む。時に年二十四なり

云々

と記されてゐる。(紀)

と記されてゐる。(紀)

と記されてゐる。(紀)

と記されてゐる。(紀)

と記されてゐる。(紀)

と記されてゐる。(紀)

と記されてゐる。(紀)

と記されてゐる。(紀)

と記されてゐる。(紀)

と記されてゐる。(紀)

と記されてゐる。(紀)

49.5.19(日) H29(2017) 8.9~18(日)
45.12.11(日)

ぎゃくほう

逆討

あ5.029-3/3

5.029^P-3/3

孝元 姫19所
孝元

何のため大津皇子が姉大来皇女を訪ねていったというのだろうか
へ大津皇子が、反逆を思い立った後に、姉
大来皇女を訪ねていった
なとと
もいも謀反が露頭一たら、ただちに大来皇
女に嫌疑がかかる。
へ姉大来皇女に危言が及ばないよう
と留意し、大津皇子は、絶対で天照太神
の宮に近づかなかつたであらう
と思われる。
つまり、
へ大津皇子が大来皇女をひそかに訪ねてい
ったのは、――謀逆の気持ちなど全くない
幼少の頃のことであった
と推察される。

＊

H11.12.5
H9.5.19 (A)
H5.12.12 (B)

42770
紀下388⁸

紀下382⁵ 5,030⁷

まきう
吉凶 538⁷

7422 云
掌る 1476⁷
紀下416

1436^{P-1/2}
1445⁷

元
占
星
台

占星台

天武四年(六十七) 一月一日
陰陽寮

天文・暦・氣象觀測の事を掌る
珍しい品々を捧げて、天武天皇にたてまつ

た。(紀)
一月五日 始めて占星台(天文を觀察し

吉凶を占うための施設)を建てた。(紀)
天武天皇は天文の術に長じておられたよう

(1) 天武即位前紀に、
天文・遁甲(一種の占星術という)に能

と記されており

(2) 天武紀元年六月条に、

黒雲有り。広さ十余丈にして天に経水

時に、天皇(大海人皇子)異びたまふ。則ち
燭を擧げて親ら式をとりて、占ひて曰はく、

云々

とある

などによつて、うかがい知ることが出来る。

＊

■ さて、先に述べたとおり、

「奈良県高市郡明日香村飛鳥で飛鳥時代

の七世紀中ごろに造られた楼閣状の建物遺構

水時計遺跡の発掘調査が行われた

という。(第八章へ漏刻)の項において

既述)

■ その結果、

「幅一・八メートルの溝に囲まれた一辺二十二・

五メートルの正方形の基壇の上に、東西・南北とも

五本ずつの柱(直径約三十センチ)をもつ楼閣状

の建物が立ち、この建物内に漏刻が設置され

ていた(第525・526頁写真図版770へ水落遺跡)

ことが明らかにされた。(「朝日新聞」昭和

五十六年十二月十八日付参照)

■ また、建物の基礎の部分についての調査も

行われた。

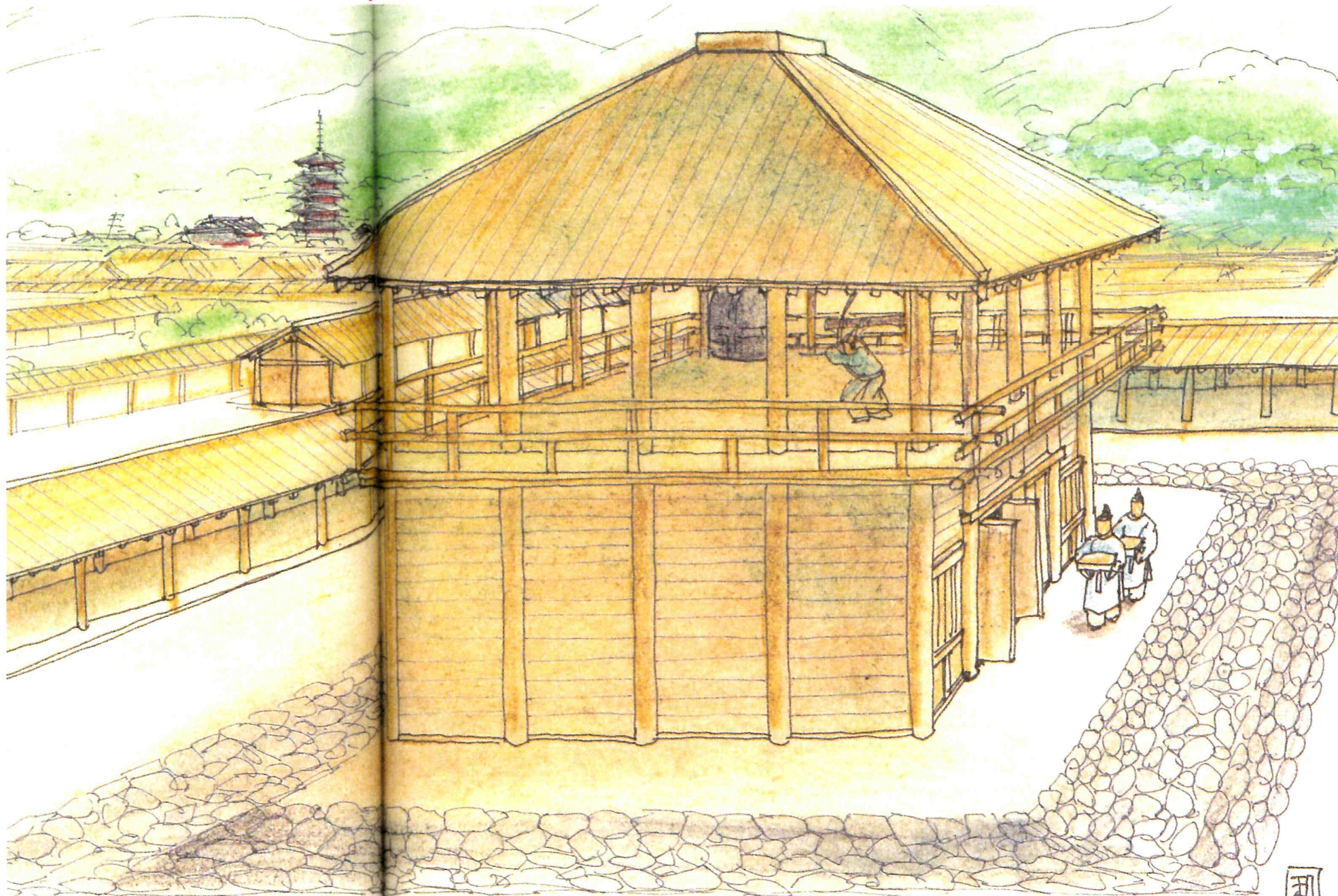
「建物を支えていた二十四個の礎石が、丹念

に突き固めた基壇の地下約一メートルのところにあ

った。

縦の黒い線を、出来るだけ目立たないようにして下さい

5,031P_2/4

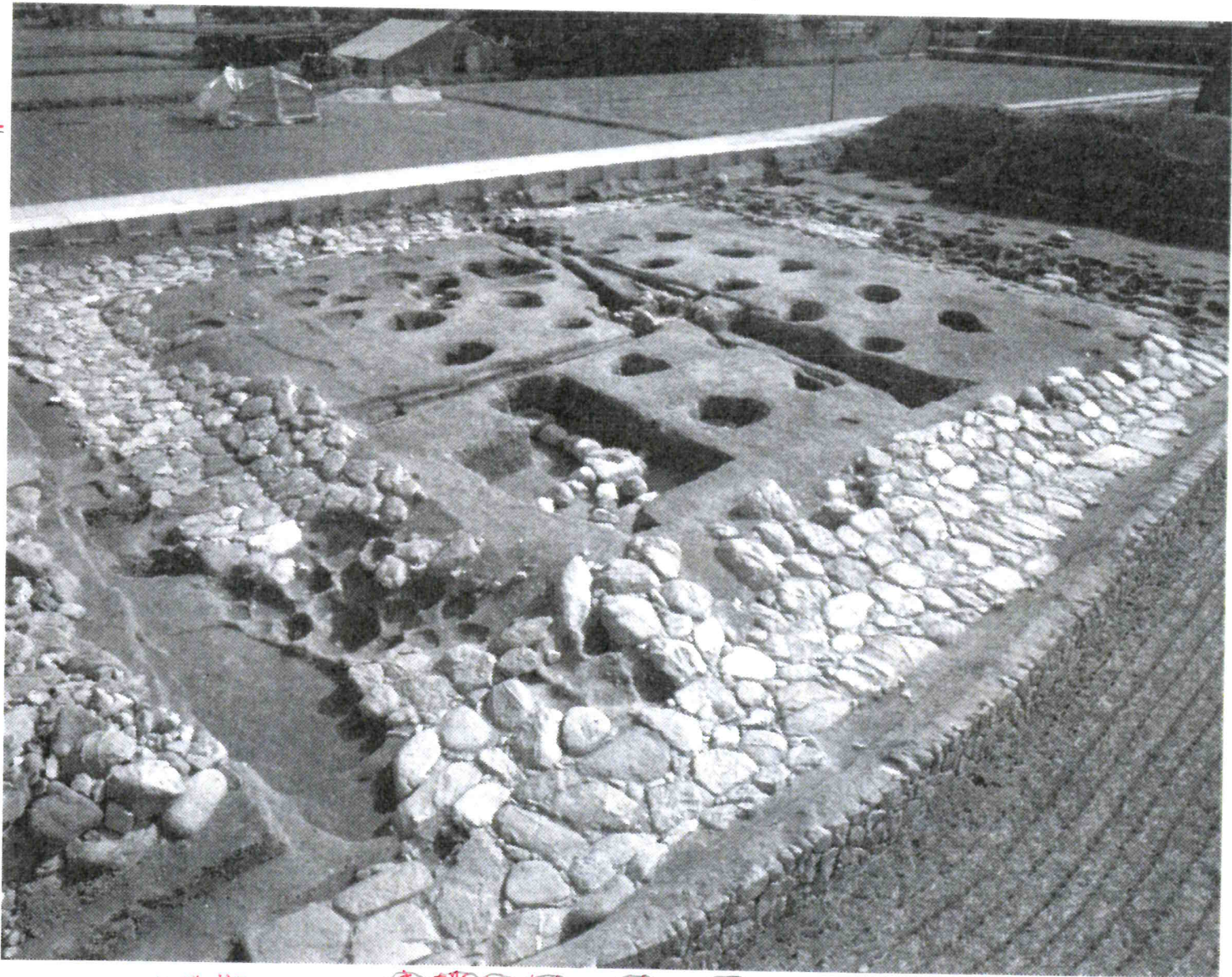
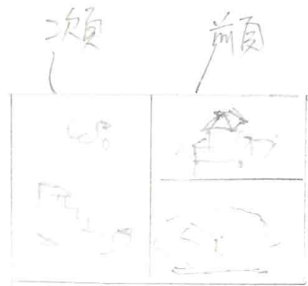


・カラー
 ・右良の上半分。左右も限度一杯はみ出して掲載下さい。
 1469 第525図 漏刻(水時計)台の復原想像図
 3/4

和

5,031P-3/4

- ・右頁の下半分。
- ・大きく掲載下さい。



カ
ツ
↑
↑

1406

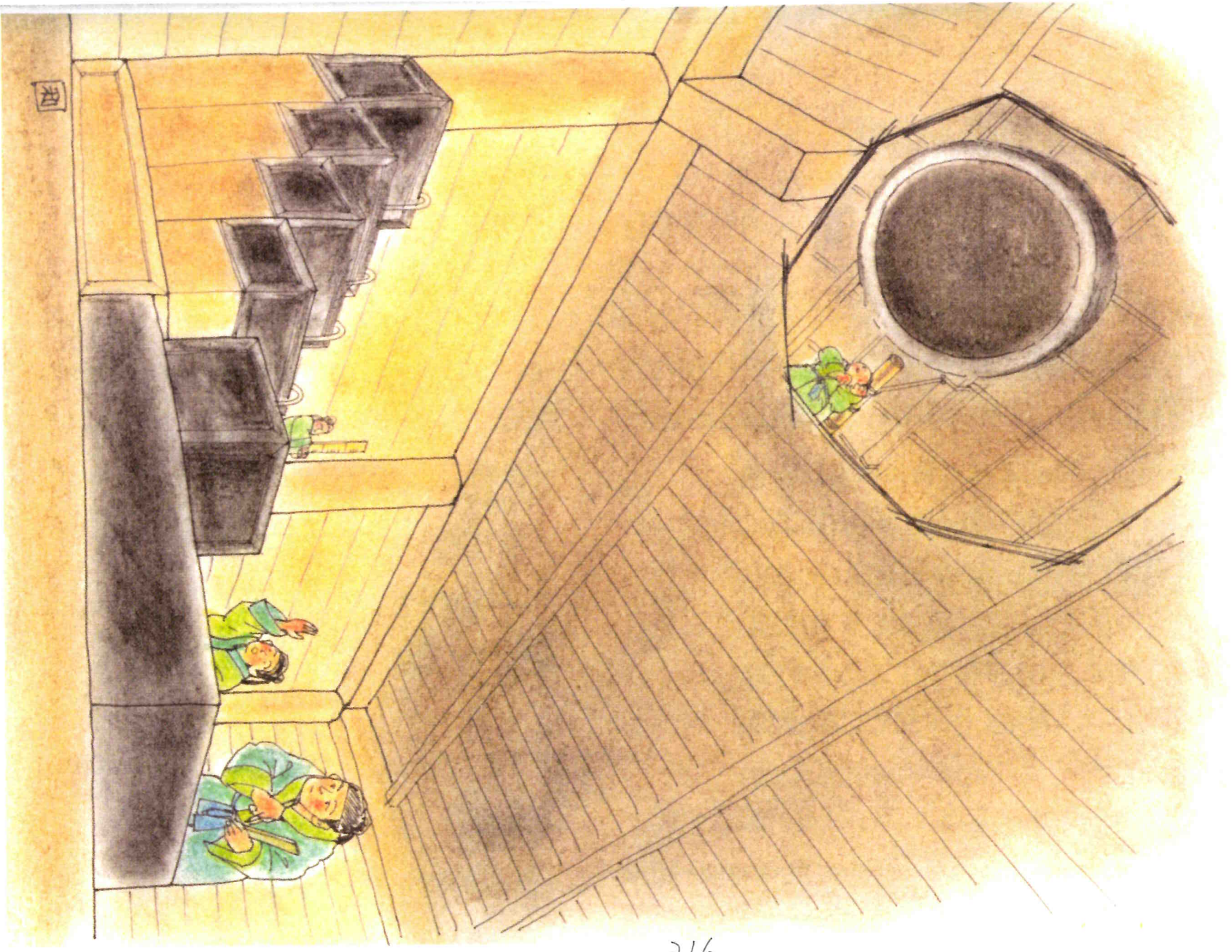
写真図版 770 ^{みず おち}水落遺跡 ^{きたん せん}基壇斜面の貼り石

1306

『飛鳥むかむかし』飛鳥誕生編、奈良文化財研究所、朝日新聞出版、2016年8月25日発行、左:12頁、上:184頁、下:194頁参照

・カー
・左傾全面に、大きく掲載下さい。

5,031 P- 4/4



316

1464

第 526 図 飛鳥の水時計復原図

1264、水槽を重ねた水時計で時を計り、鐘などで時報を告げたと考えられている。

ブルーシート 紀下416P
3/4 古星台 4458 中

5,032P

次領3P 42770K 411.12.11⑤
天正改行

礎石の周りに、まず固定用の直径五十センチほどの石を数個置き、この石をさらに固定する。ため、その水石の石から数十センチ離れた所に同い大きさの石を置き、固定用の石とこの石の間とひとまわり小さい石を詰めて二重に固定してあったという。(写真図版 770 中央部分の石の配列参照)

京大名誉教授(考古学)は、こんなには嚴重な礎石の固定方法は見たことがない。よほど振動を嫌ったものと思われ、小ほと単に漏刺を置くだけの施設であらう。この施設を築く必要はない。と述べ、天武紀四年(六七五)一月五日条に記載され、天体観測所、占星台のよう施設があったのではないかと推測している。(朝日新聞、昭和五十六年十二月二十二日付参照)

なお、柱穴にまつてい土砂の中から六

施設 4457P 同文 317

「墳墓」奥付にルセ着る
手持ちの本

紀F343^P
④4457^P 大井の建物 前頁11行

かきとめ
次頁15行
5,033^P

天和10年4月25日
紀F416^P 紀F376^P 新同知放ブルー3/4
紀F343^P

く
い。

七〇し六八〇年頃の土器が出土したことから
「この建物は、斉明六年（六六〇）ころに
造られ、この土器の年代（六七〇し六八〇）
に取り壊された」と推定されている。（「朝日新聞」昭和五十六
年十二月十八日付参照）
■とすると、
△この建物は、斉明六年（六六〇）ころに
造られたのち、―――天智十年（六七
一）四月二十五日、もしくは天武四年（六七
五）一月五日に新しい漏刻台が出来たの
不要になつて取り壊された
と
いうのだろうか。
そのうち、
■「か」ながら、地下の
わめて堅固に据えられていた点とを考えると
き、不審に思われる。
（「齊明六年（六六〇）」、皇太子中大兄が
冠を据えつける「たけのこ」になにも頑
丈な礎石の固定方法を採用されたとは解しに

671 675
-660 660
11 15

紀F326 紀F343
④4760°

紀F592°
1211 5.034°

694 675
19

(2) 更に、うれから十一年、十五年後の天智十年(六七五)もしくは天武四年(六七五)に、この最重な漏刻台(発掘された漏刻台)を捨てて、いったいどうして新しい台を造る必要があつたのだろうか、と疑問に思ふ。

あるいは、
① 斉明六年(六六〇)に初めて造られた漏刻は、天智十年(六七五)に大宰府の日月山(辰山のなまりかという)へ移され、(第八章へ漏刻)の項において既述)

② 天武四年(六七五)明日香村飛鳥の地(発掘の地)に、新たな漏刻を備えた占星台(天文を観察し吉凶を占うための施設)が造られた、
ではなからうか

と、いうことなのかも知れない。
藤原京への遷都(六九四)の頃、もしはそれ以後に取り壊されたのであろう、と想像される。

では、柱が抜き取られたあとの「柱穴」の中から見出し出された土器について、はどうだろうか。
(あつた破片)
解衆

H9.5.20(4) H29(2017)8.9~18(4回) H元3/15(4) 5,035P
H5.12.14(4) A30(2018)11.19日~11.20(4回) H31(2019)4.21(4) 5026-4219P
5,035P

新や(2)で述べた。 かも知れない 前頁15頁

5032 P 20頁

わけでは
とは限らない

造られて
すや
土に埋もれる
全土器が
毀れ

いうまでもなく

ということなのかも知れない。

(5) 土砂などが近年の発掘調査の際に出土した、

(4) 柱が抜き取られた後、柱穴の中へ、

(3) すべてから、長期間にわたって、占星台内

(2) 天武四年(六七五)一月五日以降に、占星

(1) 六七〇~六八〇年頃に造られ、

あえていえば、この土器は